

〈実践報告〉

大学生による児童虐待防止プロジェクトを通したアクティブラーニング ——関連書籍のPOP制作を中心として

菅野 恵 KANNO Kei

-
- 1 —— 問題と目的
 - 2 —— 方法
 - 3 —— 結果
 - 4 —— 考察

【要旨】本稿は、心理学を専攻し児童心理学のゼミに所属する大学生が、児童虐待防止プロジェクトに取り組み、児童養護施設の視察や「学生によるオレンジリボン運動全国大会」への参加などを通して学んできたアクティブラーニングの報告である。特に、大学内で児童虐待関連書籍を紹介するために本のキャッチコピーを盛り込んで制作したPOP展示イベントでは、イベントに訪れた学生からのアンケート集計分析を通して啓発活動の効果を感じることができた。大学図書館とのコラボレーションも実現し、学生に関心を高めてもらったためのきっかけになった。また、全国大会でプロジェクトについて報告することによって、審査員や他大学の方からのフィードバックを得る機会になった。今後の展望として、大学内にとどまらず、大学近隣地域で児童虐待防止プロジェクトを行うといった発展的な取り組みが期待される。

1 —— 問題と目的

厚生労働省（2019）によると、児童虐待相談対応件数は15万9,850件となっており、過去最多を更新し続けている。2018年3月の目黒女児虐待事件や2019年1月に起きた野田小4女児虐待事件では、転居に伴う関係機関の連携不足や、児童相談所が一時保護したにもかかわらず子どもからの希求行動を見過ごした実態が明るみになった。家庭という密室の空間で起こりやすい虐待を防ぐためには、一般市民や学校、関係機関の協力が不可欠であり、まずは虐待問題に関心を高めてもらう必要がある。

さて、日本の地域社会における児童虐待防止の取り組みとして、オレンジリボン運動がある。2004年に栃木県小山市で起きた子どもの暴行死事件をきっかけに市民団体が立ち上げ、現在では全国的に展開している。厚生労働省は、毎年11月を児童虐待防止推進月間として定め、地域の虐待防止啓発活動の推進を促している。なお、オレンジリボン運動の総合窓口は、2006年からNPO法人児童虐待防止全国ネットワークが担い、近い将来親と

なる若者に対する子ども虐待防止にかかわる啓発の一環として、平成 27（2015）年度から「学生によるオレンジリボン運動」の活動を支援している。

さて、高等教育における児童虐待の学びは、社会福祉領域で主に展開されてきたが、被虐待児に対する心のケアが叫ばれるようになり、心理学領域でも求められつつある。たとえば、2019 年 2 月に日本初の心理職の国家資格である公認心理師が誕生し、虐待問題にかかわる心の支援が期待される。公認心理師法の施行規則では、公認心理師となるために必要な科目として「福祉心理学」（学部）、「福祉分野に関する理論と支援の展開」（大学院）が求められ、学部において「虐待についての基本的知識」を学ぶこととされている（日本心理研修センター，2018）。しかし、虐待問題への学びとして受動的になりやすい座学だけでは限界があることから、学生自ら探究心を高め、主体性をもって学習に取り組むことが望まれる。そこで、アクティブラーニングを通した学びが有効である。

アクティブラーニングは、“能動的な学習を促す授業の総称であり、さまざまな教育方法やアプローチを内包する傘概念”（関田，2017）である。また、アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）によると、学習定着率を高めるためには、行動の実践（Practice Doing）と他者に教えること（Teaching Others）が有効であると示唆している。なお、学習定着率を示したラーニングピラミッド（Learning Pyramid）を用いたモデル（Dale，1946 による“経験の三角錐”が出典元とされている）は、数値や階層順序に実証的根拠が乏しい（土屋，2018）といった疑義があるものの、実践的な学びや他者に伝達する試みとして主体的に学ぶ姿勢を身につけるうえで重要な示唆を与えている。

ところで、学生によるオレンジリボン運動やアクティブラーニングに関連する先行研究によると、学生によるオレンジリボン運動の必要性和課題に触れた論文（片岡・山崎・坂本・川崎，2014）や、オレンジリボン運動のチラシ配布など周知を主とした実践報告（大熊，2017）、多領域の連携・協働のための医学教育研修に関する報告（小林・川崎・増沢・大川・南山，2010）、里親制度に関する広報活動を取り入れた試み（福島，2016）などいくつかみられるものの、学生自ら調べたことを発信するような取り組みは少ない。そこで、学生による調べ学習をもとに発信する手段の一つとして虐待に関連する書籍から学ぶことは、大学図書館を活用できて取り組みやすい。これまで、児童虐待の理解を促すための書籍の紹介（上別府，2004）はみられるが、学生によるオレンジリボン運動として子どもの虐待関連書籍を活用した取り組みに関する報告は筆者の知る限りない。

なお、書籍を活用した授業実践として、POP 制作を活用する方法がある（水野，2015）。POP は Point of purchase advertising の略で店頭プロモーションの手法として広告媒体に使われているが、書店での販売促進 POP から発展し、現在では全国の図書館で「オススメの本」などとしてキャッチコピーや簡単なあらすじを記した POP が活用され、貸出促進の一助となっている。また、全国的に自治体や出版社が POP コンテストを開催し、本の魅力を伝えるための取り組みが活発化しつつある。そのため、子どもの虐待関連書籍を POP で紹介することは、子どもの虐待問題に関心をもっていない人にも訴える効果が期待される。

本稿では、大学生による児童虐待防止プロジェクトの経過を報告し、子どもの虐待関連書籍のPOP制作を中心としたアクティブラーニングとしての有用性について検討を行う。

2 ― 方法

1) プロジェクト参加者の内訳、実施期間

児童虐待防止プロジェクト（以下、プロジェクトとする）参加者は、首都圏にある文系の私立大学で心理学を専攻し、児童心理学のゼミに所属する3年生10名（男性5名、女性5名）であった。

2) プロジェクトの実施期間

プロジェクトの実施期間は、2018年4月から2019年2月であった。プロジェクト内で実施した詳細の日程は、結果に示した。

3) アンケートの実施と分析

ゼミ担当教員が開講している「虐待防止の心理学」などの授業でゼミ生による展示の告知を行い、展示の内容に関して無記名式の簡易的なアンケートへの回答協力を求めた。その際に、展示への訪問やアンケートへの回答は強制ではなく任意であるとし、授業の成績評価に影響しないことを同時に伝えた。

アンケートの内容は、展示全体の印象や感想の記入を求めた自由記載欄、子ども虐待について関心度が高まったかを問う項目、児童虐待通告・相談ダイヤル「189」を覚えたかを問う項目の3つで構成した。

アンケートの分析は、KJ法（川喜田, 1970）を参考に、記載内容をカテゴリーに分類し、カテゴリー名を付けて表にまとめた。分析作業はゼミ生全員で行い、ゼミ担当教員と検討しながら進めていった。

4) 倫理的配慮について

アンケートを提出しなかったとしても成績評価に影響しない旨、授業にて説明を行った。また、ゼミ生がプロジェクトに取り組む時間帯は、原則ゼミの授業中とし、他の授業に支障がないように配慮を行った。なお、「学生によるオレンジリボン運動全国大会」の写真については、オレンジリボン運動事務局から掲載許可を得た。

3 ― 結果

1) 児童虐待の基礎的学習

2019年4月～5月に「養育事典」（芹沢・菅原・山口・野辺・箱崎, 2014）を基に複数キーク

ードを分担して発表し、児童虐待の基礎知識を学んだ。並行して、「虐待防止の心理学」や「福祉心理学」の授業履修を推奨し、児童虐待に対する理解を深めた。

2) 児童養護施設の視察と関心の高まり

6 月には児童養護施設へ視察に出向き、直接処遇職員による講話や心理療法担当職員による心理室の説明を通して、被虐待児の心のケアについて学んだ。その過程で徐々に児童虐待問題への関心が高まり、「自分たちで身近なことからできること」を目標に 11 月の児童虐待防止推進月間で取り組みそうなことを議論し、大学内にある展示室で虐待関連書籍を紹介する POP 制作を行うことが決定した。

3) POP 制作と「子ども虐待防止フェア」の実施

10 月中旬に大学図書館職員から POP 制作のレクチャーを受けたのち制作を行った。紹介する児童虐待関連書籍は、図書館に所蔵している書籍からゼミ生の判断で選定した。なお、POP 制作で選定した書籍リストを Table1 に示した。

制作期間は、ゼミ授業実施日のある 4 日間を基本とした。ただし、ゼミ授業時間帯に終

Table1 POPで紹介した書籍のリスト

書籍タイトル	著者	出版社
1 “It”（それ）と呼ばれた子：完結編さよなら“it”	デイヴ・ベルザー	ソニー・マガジズ
2 虐待 沈黙を破った母親たち	保坂 渉	岩波書店
3 誕生日を知らない女の子：虐待—その後の子どもたち	黒川祥子	集英社文庫
4 凍りついた瞳（コミックス）	ささやななえ／原作：椎名篤子	集英社
5 消えたい：虐待された人の生き方から知る心の幸せ	高橋和巳	筑摩書房
6 ネグレクト：育児放棄 真奈ちゃんなぜ死んだか	杉山春	小学館
7 ルボ虐待：大阪二児置き去り死事件	杉山春	筑摩書房
8 親になるほど難しいことはない	椎名篤子	講談社
9 児童虐待から考える：社会は家族に何を強いてきたか	杉山春	朝日新書
10 愛を知らなかった子： ネグレクトされた少女が家族を得るまで	ダイアン＆バーニー・リーロウ ／庭田よう子訳	講談社



写真 1 POP 展示の様子（注：中央はコンテスト入賞作品）



写真 2 「児童虐待から考える」（杉山春著）を紹介した POP

えられなかった場合、自宅で作業するゼミ生もいた。

そして、11月22日～12月6日にかけて「子ども虐待防止フェア」として展示室にて制作したPOP展示を行った(写真1～3)。また、オレンジリボン運動「公式ポスターコンテスト2018」に、偶然であるが本学の芸術学科の学生の作品が入賞したことから、受賞学生の協力を得てポスターも同時展示を行った。また、展示室に訪れた学生に簡易的なアンケートを実施し、オレンジリボン運動のチラシも配布した。

4) 図書館とのコラボレーション

大学図書館の協力を得て、学生が紹介した書籍の特設コーナーを設け、展示に訪れた学生がすぐに書籍を借りられるように対応してもらった(写真4)。件数は明らかにできなかったが、展示に訪問した直後に借りた学生が数名いたと図書館職員から報告を受けた。

5) アンケートの集計

展示に訪れ簡易的なアンケートに回答した学生82名のアンケート内容について、ゼミ生で手分けして分析作業を行った。その結果、78%の人が子どもの虐待問題への関心が「高まった」と回答し、「やや高まった」は20%であった。「あまり高まらなかった」は2%存在した。児童虐待通告・相談ダイヤル「189」を覚えたかという問いに対して、「覚えた」は80%、「覚えていない」は20%であった。展示の印象や感想を求めた自由記述欄の結果を表にまとめた(Table2)。

KJ法を参考にカテゴリー化したところ、小カテゴリーは10件に分類され、大カテゴリーでは「企画全体に対する関心」、「虐待の認識」、「社会的視点」、「その他」の4件に分類された。

「企画全体に対する関心」の小カテゴリーは、「展示の印象」、「書籍への関心」、「虐待への関心」、「通告ダイヤルへの関心」であり、記述例から企画に対する反響がうかがえた。

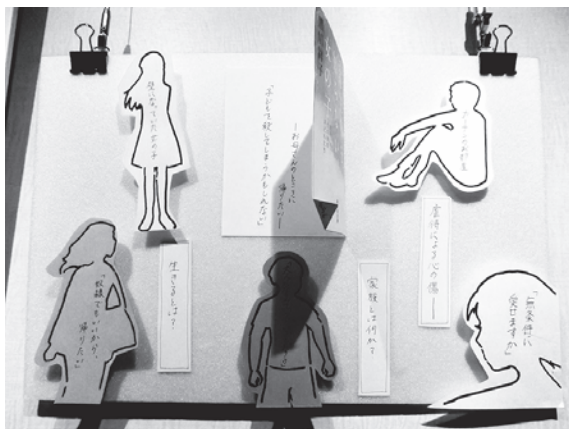


写真3 「誕生日を知らない女の子」(黒川祥子著)を紹介したPOP
(注: 表紙をめくるとメッセージが書かれている立体的な作品)



写真4 図書館入口前に設置された特設コーナー

「虐待の認識」の小カテゴリーとして、「虐待についての意見」、「虐待の影響」、「加害者に対する認識」が示され、虐待問題に対する一方的な見方ではなく、多角的に捉えられるきっかけになるような記述が目立った。

「社会的視点」では、「メディアのあり方」、「社会保障」、「虐待の認知度」といったマクロな視点でのコメントが述べられていた。

6) 「学生によるオレンジリボン運動」の活動報告と全国大会への参加

本学の芸術学科の学生が入選した「公式ポスターコンテスト 2018」のポスター展示の使用許可を得るためにオレンジリボン運動事務局へ問い合わせたことがきっかけで、「学生によるオレンジリボン運動」への参加を勧められ、エントリーすることになった。「学生によるオレンジリボン運動」に参加した大学、専門学校数は 70 数校のようであったが、活動概要の報告書を提出したところ、「学生によるオレンジリボン運動全国大会」への出場校が 7 校選抜され、本ゼミも全国大会へ出場することになった。発表準備、予行練習を経て、2019 年 2 月 17 日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された全国大会では、ゼミ生の代表 3 名が参加し発表を行った（写真 5）。なお、発表時間は 1 校あたり発表 15 分、質疑 5 分であり、ゼミ生はパワーポイントを用いて活動の様子を写真や図表を交えて説明した。7 校すべての発表を終えると審査が行われ、授賞式で大賞 1 校、特別賞 1

Table2 「子ども虐待防止フェア」の展示に訪れた学生のイベントに対する印象

大カテゴリー	小カテゴリー	記述例
企画全体に対する関心 (51)	展示の印象 (24)	・ 立体的なPOPがよかった。 ・ 目につきやすくなりやすかった。
	書籍への関心 (12)	・ 虐待の関連書籍の多さに驚いた。 ・ 児童虐待の漫画があることに驚いた。
	虐待への関心 (12)	・ 性、年齢、人種などで起こる虐待をもっと学びたいと思った。
	通告ダイヤルへの関心 (3)	・ ダイヤルを知らなかったのにより機会になった。
虐待の認識 (61)	虐待についての意見 (23)	・ 子どもへの強要が子どもの人生を決めつけ、感情をしめつけるのではないかと。 ・ 虐待は死に至る可能性が高まることがわかった。
	虐待の影響 (18)	・ 虐待といってもすべてが同じではないことがわかった。 ・ 虐待がその後の人生に影響を及ぼすということを知ることができた。 ・ 日々のストレスは計り知れないと思った。 ・ 被虐待児の将来の心のケアや自立も考えてほしい。
	加害者に対する認識 (20)	・ 親自身も傷つき苦しんでいる場合もあり、親も救わなければならないと思った。 ・ 子どもを救えないのは親以外の問題もあることがわかった。 ・ 虐待加害者だけが悪いという認識から広い視野で考えられるようになった。
	社会的視点 (8)	・ 単に報道するだけでなく、いったい何が原因なのか、何を確認すべきかを考える必要性を感じた。
社会的視点 (8)	社会保障 (2)	・ もう少し行政は早く虐待に気づいてほしい。
	虐待の認知度 (3)	・ 児童虐待はとても大きな問題だと思った。
その他 (4)		・ 自分がいかに恵まれているのがわかった。
		・ 私にとって一番よくないのは「見て見ぬふり」だと思った。

注：（ ）内は回答数。

校、敢闘賞1校の3校に賞が与えられた。本ゼミは、光栄にも敢闘賞を受賞した(写真6)。受賞理由として、児童虐待の関連書籍の紹介を展示し、図書館とのコラボレーションを行った点で独自性があり、これまでにない取り組みであるということで高く評価された。

4——考察

1) 児童虐待防止プロジェクトの経過について

ゼミ生もゼミ担当教員も初めての試みで見通しが持てないままスタートしたプロジェクトであったが、基礎的学習、施設への視察、POP制作、展示、アンケート集計、全国大会への参加といった一連の流れで進められ、段階を踏んで児童虐待問題に取り組めたことは有意義であった。基礎的学習としては、心理学を主に学ぶ学科のカリキュラム特性から、ゼミ生になじみの薄い児童福祉領域について学ぶ必要があった。具体的には、社会的養護や貧困問題などの基礎知識を学ぶ機会になり、心理学以外の学びの幅が広がった。児童養護施設の視察を機に心のケアの重要性に触れたことでさらに関心を高め、数多くある子どもの虐待関連書籍から各自テーマを絞り込むきっかけになったと思われる。

POP制作では、作業が苦手なゼミ生もいたことから戸惑う者も多かったが、得意不得意にかかわらず、それぞれ個性的なPOPが仕上がった。大学図書館職員によるレクチャーを受けた経験は、ゼミ生にとって心強く、プレゼンテーション力を高める大きなきっかけになった。児童虐待問題に関心のない人にもわかりやすくシンプルに訴えることの難しさに苦慮していたが、最大限に本の魅力を伝えるため熟読したうえで取り組んだだけでも有意義であったと考えられる。学内での学生間の相互の刺激を得られ、他学生からのフィードバックが力となって全国大会へ勢いをつけたようである。

2) 展示に訪れた学生のアンケート結果について

企画全体に対する関心として、約8割が「関心が高まった」と回答し、制作されたPOP



写真5 全国大会での発表の様子



写真6 敢闘賞受賞後の集合写真

に対する好印象のコメントが目立った。一般的に目を背けたくなりがちな子どもの虐待問題について、POPを用いて視覚的にわかりやすく提示したことが奏功したと考えられる。POPを通して「虐待の関連書籍の多さ」や「児童虐待の漫画」、「虐待による影響」などを知るきっかけになったため、関連書籍を介した啓発は大学生になじみやすかったことがうかがえる。特に、虐待は許せないといった感情的なコメントよりも、虐待加害者を救わなければならないといった内容や子どもを救えない親以外の問題への指摘もあった。社会福祉系の授業が少ない大学のため、より踏み込んだ意見を述べる学生がいたことは想定外であった。メディアのあり方や行政の対応へのコメントもみられたため、展示をきっかけに社会問題への関心をさらに高め、学生各自の専門的な学びにつなげていくことが期待される。また、アンケートの分析を通してゼミ生は他の学生から互恵的な学びを得たともいえることから、学生同士の相互の学びとしても意義深かったと思われる。

3) アクティブラーニングとしての有用性について

4月にプロジェクトがスタートした時点では想定していなかったが、結果的に児童養護施設の視察や学生によるオレンジリボン運動全国大会への出場につながり、実践的に学び、他者へわかりやすくプレゼンテーションを行うといったアクティブラーニングに発展した。児童養護施設では、被虐待児の心のケアの実態に触れたことでゼミ生の学習意欲が高まり、主体的に虐待関連書籍を読み込む作業につながった。全国大会では、発表後に他大学の教員からゼミ生に声をかけていただき、「とてもユニークな取り組みなので継続してほしい」と励まされたようである。一大学だけでは学ぶ内容が限られるものの、限定的な空間を飛び越えて他大学との交流を持てたことや審査を経て受賞したことは、ゼミ生にとって大きな自信になり貴重な体験になったため、学内外でのアクティブラーニングの可能性を今後も模索していきたい。

4) 今後の展望

今回は学内での取り組みが中心であったが、大学近隣地域での啓発活動に発展させることが課題である。今後は、公立図書館とのコラボレーションが実現することにも期待したい。

《文献》

- Dale, E. (1946). *Audio-Visual Methods in Teaching*. New York : Dryden Press. (デール, E. 有光 成徳 (訳) (1950). 学習指導における視聴覚的方法 上巻 政経タイムズ社出版部)
- 福島 里美 (2016). 里親養育の広報活動に関する実践事例研究—臨床心理学の授業で女子大学生に里親養育体験を伝える試み— コミュニティ心理学研究, 19 (2), 196-212.
- 片岡 靖子・山崎 千栄子・坂本 沙織・川崎 竜太 (2014). 「学生によるオレンジリボン運動」の必要性和その課題—大学生の児童虐待への意識調査を通して— 久留米大学文学部紀要社会福祉学科編, 14, 29-38.

- 川喜田 二郎 (1970). 続・発想法—KJ 法の展開と応用— 中央公論社
- 上別府 圭子 (2004). 児童虐待について理解するための 3 冊 こころの健康, 19 (2), 97-98.
- 小林 登・川崎 二三彦・増沢 高・大川 浩明・南山 今日子 (2010). 大学生・大学院生子ども虐待防止 MDT (多分野横断チーム) 研修と医学教育 医学教育, 41 (3), 195-199.
- 厚生労働省 (2019). 平成 30 年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数<速報値> 厚生労働省 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/000533886.pdf> (2020 年 1 月 5 日)
- 水野 欽透 (2015). 授業実践報告 POP 作りによる読書・表現活動入門 研究紀要 (長野県国語国文学会事務局), 11, 108-115.
- 日本心理研修センター (2018). 公認心理師現任者講習会テキスト 金剛出版
- 大熊 信成 (2017). 児童家庭福祉制度と学生による児童虐待防止運動 (オレンジリボン運動) の取り組み 佐野短期大学研究紀要, 28, 117-126.
- 関田 一彦 (2017). アクティブラーニングとしての協同学習の研究 教育心理学年報, 56, 158-164.
- 芹沢 俊介・菅原 哲男・山口 泰弘・野辺 公一・箱崎 幸恵 (編) (2014). 養育事典 明石書店
- 土屋 耕治 (2018). ラーニングピラミッドの誤謬—モデルの変遷と“神話”の終焉へ向けて— 南山大学人間関係研究, 17, 55-73.

謝辞: プロジェクトに取り組んだゼミ生とアンケートにご協力いただいた学生、企画にご協力いただいた図書館職員の皆様、オレンジリボン運動事務局や関係者の皆様に深謝いたします。

